

第77号

● 目次 ●

巻頭言「久しぶりのロシア極東」	1
最近の研究会・シンポジウム等	
東北大学東北アジア研究センター公募型共同研究ワークショップ・第4回川内茶会セミナー	
『東北アジア先史「石」文化への学際的視点—地質学・考古学からのアプローチ—』	2
東北アジア研究センター公開講演会「玉—その起源と東北アジア先史の「石」文化—」	2
日露ワークショップ2018「Asian Studies at NSU and TU III」	3
シンポジウム「『東北の近代と自由民権—「白河以北」を越えて』が問いかけるもの」	3
新任・客員教授紹介	4
私の東北アジア研究「民主と独裁の狭間で揺れる香港」	6
著書紹介	7
活動風景「沈み込む太平洋プレートの実態解明に向けて」	8
編集後記	8

巻頭言

久しぶりのロシア極東

東北アジア研究センター 教授
寺山 恭輔

本年3月、ロシア極東のハバロフスク、ウラジオストクを訪問した。5年前にノヴォシビルスクでセミナーを開催した帰りにハバロフスクに立ち寄ったことはあったが、文書館での史料収集は16年以上も前に遡る。宿泊はロシア版の民泊で特にハバロフスクでは70㎡はあると思われる広々とした高層マンションを手ごろな価格で利用し、快適だった。米国発のプラットフォームがロシアにも浸透していることがよくわかる。帰りがけのウラジオストク空港ではイルクーツクでの4年の労働を終えてピョンヤンに帰国する北朝鮮の労働者集団に出くわし、一人にロシア語での即席のインタビューも敢行した。別の集団と交代するらしく、核やミサイルの資金源を断ちたい日本としては看過できない。

戦前期のソ連極東地域に関して、モスクワの中央の史料を補完すべく、地方の史料を閲覧することが今回の私の訪問の目的である。ハバロフスクの旧共産党の文書館を再訪したところ、本来ならばFSB（KGBの後継組織）に、私に閲覧を許してよいのか許可をもらうのに最低でも10日はかかるとの答え。前はこんなことはなかった、モスクワの普通の（外

務省や治安機関は別）文書館は、閲覧申請書を持参すればすぐに文書を見せてくれるはずだと抗議して押し問答、結局2日後には閲覧を許され無駄足にならずに済んだ。同じ時期に日本の他大学から来ていた院生は門前払いを食らったが、このような経験は私にとっても初めてで、ソ連崩壊直後の史料公開の熱気からの後退、ソ連回帰を思わせる出来事だった。

ハバロフスク滞在中に大統領選挙が行われた。体制翼賛的なプロパガンダ放送ばかりでここ数年見る気も失せていたTVのスイッチを久しぶりにつけると案の定、ニュースでは大統領の精力的な活動（他の候補は無視）、討論番組では現体制礼賛、欧米批判のオンパレードだった。体制からずれたスタンスを有する論者を討論者に含めているところがミソで、その意見は司会者を含む他の論者に圧倒される（背景に座っている観客が合図を受けて一斉に拍手）という仕組みである。きわめて巧妙に演出され、国民の教化、愚民化政策の役割を果たしている。批判票の受け皿になる可能性のあった候補者はそもそも立候補を許されず、大統領就任式直前のデモも弾圧されて終わりを告げた。民主主義や言論の自由といった価値観は無視して、このようなロシアの現体制に迎合した文章を書く日本人研究者も中にはいて、講演に招かれるという。それが国際交流の名のもとに大学や所属機関の評価の対象になるのだから困ったものだ。複数の警官に捕まえられて抵抗を示すロシアの若者にこそ将来の希望を見出した。自分にそんな勇氣はないけれど。



「シベリア鉄道の終点ウラジオストク駅、レーニン像、ルースキー島連絡橋（世界最長の斜張橋）」

最近の研究会・シンポジウム等

東北大学東北アジア研究センター公募型共同研究ワークショップ・第4回川内茶会セミナー『東北アジア先史「石」文化への学際的視点—地質学・考古学からのアプローチ—』(2018年2月9日)

東北大学東北アジア研究センター公募型共同研究ワークショップ・第4回川内茶会セミナー『東北アジア先史「石」文化への学際的視点—地質学・考古学からのアプローチ—』を、川内北キャンパス(川北合同研究棟 1F CAHE ラウンジ)にて開催し、延べ30人の参加があった。

このワークショップは本センター公募型共同研究「東北アジアにおける地質環境と「石」文化の長期的相互作用の研究」(研究組織: 田村光平・学際科学フロンティア研究所、熊谷亮介・文学研究科、洪 惠媛・文学研究科、青木要祐・文学研究科、阿子島 香・文学研究科、辻森 樹・東北アジア研究センター)に関連して、同共同研究、学際科学フロンティア研究所、本センター学術研究ユニット(東北アジアにおける地質連続性と「石」文化共通性に関する学術研究ユニット)主催、本センター共催、熊谷さん(博士課程大学院生)を事務局として企画・運営した。

先史時代において、「石」は利器や装飾などに用いられる重要な資源であった。地域固有の地質環境は、先史時代の文

化の多様性や共通性に強い影響力を持つ。この関係性を具体的に問うためには、「石」文化の背景にある地質環境の知見と、先史文化に対する考古学の知見とを相補的に連携させることが望ましい。ワークショップでは、趣旨説明、公募型共同研究の成果、事例研究の紹介の他、地質学と考古学の双方で活躍する研究者を招いて講演いただいた。また、旧石器時代の石器の展示も行った。東北アジアを舞台とした地質環境と先史文化の関係について活発な議論が行われた。(辻森 樹)

開会の挨拶/辻森 樹(東北アジア研究センター) 趣旨説明/阿子島 香(文学研究科)
飯塚義之(台湾中央研究院地球科学研究所) 「先史時代の東アジアから東南アジアにおけるネ フライト製石器の分布」
秦 昭黎(元山形県立うきたも風土記の丘考古資料館) 「資源環境としての珪質頁岩の特徴・形成環境・ 分布状況・利用形態」
青木要祐(文学研究科) 「韓国・全羅北道における石器石材調査」
熊谷亮介(文学研究科) 「韓国・日本における旧石器石材利用戦略と狩猟 用石器の形態の比較」



東北アジア研究センター公開講演会

『玉 — その起源と東北アジア先史の「石」文化』(2018年2月10日)

東北アジア研究センター公開講演会「玉 — その起源と東北アジア先史の「石」文化」が、一般社団法人日本鉱物学会、一般社団法人日本地質学会、NPO 法人地球年代学ネットワーク、東北大学総合学術博物館を後援に、川内キャンパス(講義棟 A 棟 200 教室)で開催された。千葉聡副センター長の講演会の趣旨説明に引き続いて、3名の講師(写真)が次の講演を行った。地質学・鉱物学、鉱物学・考古学、考古学の順の構成であった。

- 「世界の翡翠 — 新しい地質学的視点 —」辻森 樹(東北アジア研究センター)
- 「先史時代のネフライト製石器: 化学分析からわかること」飯塚 義之(台湾中央研究院地球科学研究所)
- 「「石」文化と氷河時代末期の人類 — フランス・北米・東北アジア —」阿子島 香(文学研究科)

「玉」(中国語読み yù)は、中国語圏では宝石を指す総称である。とりわけ深緑・乳白半透明の宝石として人気の高いジェード(jade)のことを指す場合が多いが、ジェードには「硬玉」(ジェイダイト)と「軟玉」(ネフライト)の2つの種類がある。日本ではどちらも「翡翠」(中国語読み feitsui)と称されることが多いが、両者はそれぞれ全く異なる岩石である(厳密には「翡翠」は「硬玉」のなかでも特に深緑が鮮やかで美しい種類をいう)。国内の縄文から古墳時代にかけての遺跡から出土する勾玉・管玉の主要な石材としてもジェー

ドは広く知られている。しかしながら、見かけの類似性と用語の混同から、2つのジェードの認識は社会のなかで必ずしも十分でない。

今回の公開講演会は、その「玉」をテーマに、世界の「硬玉」(=翡翠)について地質学的・鉱物学的な新しい視点を辻森が紹介し、台湾から来ていただいた飯塚先生が「軟玉」(ネフライト)について、「硬玉」との違いを解説した。飯塚先生はネフライト製考古遺物の(造岩鉱物の)非破壊元素分析を通して、鉱物学的遺物の産地同定と物流推定が可能という事例を分かり易く紹介した。さらに、阿子島先生が考古遺跡から発掘される石器や遺跡構造から氷河時代末期の人類の暮らしと行動を探る考古学的な研究をわかり易く紹介した。

会場では糸魚川、カリフォルニア、グアテマラ産の大きな翡翠の標本と日本鉱物学会の英文誌の翡翠特集号が展示された。仙台市近郊の一般市民を中心に延べ89人の参加があった他、日本の縄文文化を研究しているオランダ人考古学者が東京から駆けつけた。(辻森 樹)



写真: 左から辻森樹、飯塚義之博士、阿子島香教授

日露ワークショップ 2018 「Asian Studies at NSU and TU III」 (2018年2月20日)

日露ワークショップは、ノボシビルスク大学人文学院でアジア研究を行っている教員・学生を招き、本学の教員・学生と研究交流を行う企画である。学生を交えた交流は一昨年に始まり、今回で3回目となる。今回も東北アジア研究センター大会議室を会場として開催された。講演では、ノボシビルスク大学から地球物理学のミハイル・エポフ博士が「環境研究における地球物理学の応用の人文的的局面」と題して遺跡探査でのレーダ技術の利用について、日本研究のエレーナ・ヴォイティシク教授が「香の政治と芸術」と題して伊達家など大名における香の文化を、シベリア・極東史研究のアンドレイ・ズーフ教授は「16世紀末から18世紀におけるシベリア諸民族のロシア帝政権力の合法化」と題してアジアロシアの歴史の一端を、東北大学から内藤寛子助教が「権威主義における法治：中国における中国共産党の指導と環境保護法改正」と題して環境保護法制を事例とした中国の統治体制の性格をそれぞれ論じた。続いてノボシビルスク大学の大学院学生3名、東北大学大学院生5名がそれぞれの研究テーマで発表を行った。ロシアの学生は、後漢期の曹操、明代の鄭和、日本の菊紋に関する発表を、本学の学生はロシア極東のトナカイ牧畜民、日韓の旧石器、近代中国の文学者穆時英、北京の新聞「晨报」、満洲国のモンゴル人向けの中高等教育など、幅広い話題に及んだ。講

演・発表はすべて英語で行われた。学生発表では、各発表に対して、教員・学生から活発な質問・意見が交わられて、充実した交流となった。会の終了後、本センター佐藤源之教授研究室の学生達が合



ワークショップ会場

流し、中国の旧正月を祝って懇親会が行われた。今回のワークショップも、例年同様本学ロシア交流推進室、東北アジア研究センター、大学院文学研究科、国際文化研究科とノボシビルスク大学人文学院の共催で実現したものである。

(岡洋樹)



講演するエポフ教授



左からエポフ、ヴォイティシク、ズーフの各教授、内藤寛子助教

シンポジウム

『東北の近代と自由民権—「白河以北」を越えて』 が問いかけるもの』 (2018年2月17日)

東北の近代を考えるうえで、自由民権運動は重要な意味を有する。明治期、「白河以北一山百文」と言われ、後進地として蔑まれた東北。民権運動はそれを払拭する好機だったのである。こうした問題意識のもと、上廣歴史資料学研究部門は2014年4月に友田助教を主幹に7名の研究者のご協力のもと、共同研究「東北の自由民権運動」を立ち上げた。その成果は、2017年2月に『東北の近代と自由民権—「白河以北」を越えて』(日本経済評論社刊)という論文集として結実した。幸いにもこの論文集は好評を博し、出版後まもなく増刷された。停滞が叫ばれ続けている自由民権研究だが、潜在的に再び関心が高まりつつあることがここに立証されるかたちとなった。

こうした流れをうけ、東北の地にあってより深く自由民権運動の意義を考えたいという意図から企画されたのが、シンポジウム『東北の近代と自由民権—「白河以北」を越えて』が問いかけるもの』であり、それは論文集刊行から約1年を経た2018年2月17日、東北大学川内北キャンパスで開催された。

シンポジウムでは、まず執筆者を代表して広島大学大学

院文学研究科教授の河西英通氏に「東北にとって自由民権とはなんだのか」と題してご講演いただいた。論文集の成果が東北の近代を考えるうえで如何なる意味をもったのかといった内容であった。



討論会のようす

つづいて、読者の立場から日本女子大学人間社会学部教授の成田龍一氏に「21世紀に、自由民権運動を考える」と銘打ってご講演いただいた。成田氏は近年史学史を研究されているが、それを踏まえて、史学史上における自由民権運動研究の位置づけ、さらにそのなかでの成果論文集刊行の意義についてお話しいただいた。

以上、2講演の後、討論会が行われ、有意義な議論が交わされた。

当日は雪が舞う悪天候であったが、111名の参加者に恵まれた。これを機に東北で近代の地域史、あるいは地域の自由民権運動に関する研究が活性化することを期待したい。(友田昌宏)

新任紹介



●准教授

デレーニ・アリン

私は、主に沿岸域の人々 - 日本、ヨーロッパ、グリーンランド、東南アジア、南アフリカの世界各地の人間と環境との関わりについて研究する環境人類学者です。考古学、社会言語学、自然人類学や応用人類学など人類学のすべての分野を学び、興味を持っています。沿岸地域社会や環境に関する研究は、一見、広範囲で、内容がバラバラにみえますが、私は自然資源に頼っている人々の生計を改善するために、権力などの下で生ずる無数の問題を視点を統合して分析することを中心課題としてきました。また、景観や文化遺産などを通じて、どのように人々と環境とが相互に作用し、情報をやり取りしているのかにも焦点を当てています。これらの研究の中核となっているのは、社会組織と自然資源の管理（例えばガバナンス、コモンズ、コ・マネジメントなど）であり、基本的にはどのように人々が生計や資源を管理するために組織を形成しているのかを理解することにあ

ります。社会組織の中に隠されているものとして、アイデンティティやジェンダーの概念もあります。また、社会・人口・気候の変動や災害など、変化に直面した時の社会の持続可能性と回復力にも非常に関心があります。更に、地域の知識と社会データをマネジメントと政策の中に包含することも提案してきました。今後はステークホルダーに対して水産物の社会文化的な重要性に関する研究成果を提示していく予定です。

私は自然科学者や人文科学者など異なるバックグラウンドの科学者たちと非常に多くの共同研究をしてきました。いつも国際的に仕事をしており、ヨーロッパ、アフリカ、北アメリカ、アジアなど世界中の研究者たちと強い結びつきと幅広いネットワークを持っています。将来的には、私の日本での研究を強化し、人間と環境との関わりに関連する学際的なプロジェクトでCNEASの仲間たちと協力していけることを楽しみにしています。



●助教

福田 雄

本年四月より東北アジア研究センターの助教として着任いたしました福田雄と申します。私はこれまで災害や戦争のあとに行われる慰霊祭や追悼式典のフィールドワークを国内外で実施してきました。長崎市の原爆慰霊行事や東日本大震災の追悼式、そしてスマトラ島沖地震の記念行事のあり方の調査を通じて、社会やコミュニティがいかに苦難と向き合うのかという問題を考察してきました。

死や苦しみについて調査や研究をしているという、暗い性格だなあとと言われるときがあります。

しかし、困難といかに向き合い、またいかに折り合いをつけながら生活するかという人間の営みからは、(そうならざるをえないとはいえ)ある種の楽観主義的な側面や創造的ともいえる部分がしばしば見出されます。理屈のみで突き詰めてしまうと、究極的には悲観的にならざるをえないこともありますが、そうした論理からの飛躍によって、悲惨な経験を乗り越えてしまうところに、人間や社会

の面白さを感じます。といってもそうした事柄を研究のなかで言語化するのは容易ではありませんが、これからもチャレンジしていきたいと思います。記念行為を通じて災禍といかに向き合うのかというこれまでの研究に加え、今年度からは災害遺構の国際比較研究も始める予定です。

この東北アジア研究センターでは、指定国立大学災害科学研究拠点、そして災害人文学研究ユニットのプロジェクト研究に取り組むことが主たる職務です。もともとは社会学を専門としてきましたが、これからは広く人文学、さらには理学・工学・医学によって構成される「災害科学」という領域横断的な研究プロジェクトに深くコミットしていくこととなります。東北アジア研究センターに集う多くの先生方の多様なアプローチや観点から学びつつ、これまでの自身の研究を捉え返すことができると感じています。どうぞよろしくお願ひします。



● 学術研究員
是恒 さくら

2018年4月より東北アジア研究センタープロジェクト研究部門災害人文学研究ユニットに学術研究員として着任しました是恒（これつね）さくらです。2010年に米国アラスカ州立大学フェアバンクス校を卒業（B.F.A: Painting）、国内の美術館・大学での勤務を経て2017年に東北芸術工科大学大学院地域デザイン研究領域を修了（デザイン工学）しました。国内外でのフィールドワークを作品制作過程に取り入れながら、美術家として活動しています。

2015年よりリトルプレス『ありふれたくじら』というプロジェクトを続けています。昨今の捕鯨・反捕鯨の対立の要因として鯨類が過度に特別視されている傾向があり、既存のメディアがそのイメージを増幅させていることに着目し、あまり語られる機会の無い〈人々の日常とともにある鯨〉の概念を探り、発表する活動をおこなっています。これまで、宮城県の大鹿半島と唐桑半島、和歌山県太地町、北海道網走市、米国アラスカ州

ポイント・ホープを訪れ、その土地に暮らす人々から鯨との体験談や言い伝えられてきた物語を集め、刺繍作品で挿絵をつけた小冊子のシリーズとして発行しています。発表の場は美術館、ギャラリー、公共施設や店舗の一角など様々です。このプロジェクト以外にも、作品を展示する土地でのフィールドワークが自身の作品制作の軸にあり、芸術表現を通して文化継承の新たな形を提示し、失われつつある歴史文化に光をあてていきたいと考えています。

災害人文学研究ユニットでは、美術家として表現活動をおこなってきた立場から、東日本大震災に対して制作・発表されたドキュメンタリー映画の活用と、映像による記録・伝達の文化の発展に貢献できればと思います。これまでは主に芸術・デザイン分野の中で活動してきました。東北アジア研究センターにいらっしゃる様々な専門領域の先生方から、多くのことを学ばせていただきたいと願っています。どうぞよろしく願いいたします。



● 客員教授
ハーベック・オットー
(Professor Otto Habeck)

2018年4月1日から6月30日までセンターで客員教授をしているハーベック博士は、ドイツのハンブルグ大学社会文化人類学学部教授である。気候変動・永久凍土・先住民文化に関わる文理融合研究を行っている。

受入教員の高倉はハーベック氏と10年以上前の2003年、彼がまだ独マックスプランク社会人類学研究所で助手を務めた時、同所でシベリア研究セミナーを主宰したことが縁で友人となった。当時、彼は西シベリアのコミ人のトナカイ牧畜研究をしており、同氏の研究に関心を持ったのである。2013年から16年までは国際北極科学委員会人間社会作業部会で彼と私はそれぞれの国の委員となり、頻りに交流するようになった。

2014年には国際北極科学委員会主催の国際会議 ASSW2014 がフィンランドヘルシンキ市で開催されたが、そのなかで国際永久凍土学会からの資金援助を得て同氏と「永久凍土と文化」ワークショップを共同開催した。近年ハーベック氏は、

東シベリアの文理融合プロジェクトに係わっており、上記を含め、その後もこの種のテーマで ASSW2015 の科学シンポや第二回アジア永久凍土学会 2017 で分科会を共同主宰してきた。

センターでの研究テーマは、東北モンゴルにおける永久凍土と在来の土地利用である。ハーベック氏はセンターのモンゴル研究者との交流しながら新しい研究領域を開拓している。最近日本語も学び始めており、趣味のサイクリングで仙台の初夏を楽しんでいるようである。

(高倉浩樹)



5月8日に開催された公開講演会のポスター

民主と独裁の狭間で揺れる香港

内藤寛子

1997年7月1日、香港は歓喜に沸いた。かつてアヘン戦争で清国が敗北したことにより割譲された香港が、イギリスの植民地から「解放」され、中国に返還された。当時、幼かった私は一体何が起きているのかを正確には理解していなかったが、テレビに映った花火の打ち上げや人々の喜ぶ姿を今も克明に記憶している。その後、大学生の時に初めて香港に行ったが、きちんとした知識がなくとも、大学で履修している中国語がなかなか通じないことや、それ以前に訪れた北京と異なりGoogleやYouTubeにストレスなく接続できたことなどから、香港は中国と似て非なる地域であるということを感じて理解した。そして、中国共産党の政治構造を研究するにつれ、中華人民共和国の一部でありながらも特別行政区として民主主義空間が作られている（「一国二制度」）香港の面白さに気づいた（写真1）。



（写真1）香港の代表的な観光地、ヴィクトリアピーク

それでは、香港は、これまでどのような地域として理解されてきたのか。現代中国政治研究の第一人者である小島朋之は、1992年に『中国が香港になる日—統一か分裂か—』（時事通信）を出版した。この本は、香港が経済的に豊かであり、政治的にも民主主義であることから、いずれ中国が香港化する可能性があるということを主張している。なぜこのような主張がなされたのかというと、香港返還は1984年に締結された中英共同声明によって決定したわけだが、当時の香港と中国の関係は、「アジアの四小龍である香港が中国を喰う」という構図で捉えられていたからだ。当時の中国に目を移すと、1989年に天安門事件が発生し、政治的に非常に不安定であった。また、ソビエト連邦が崩壊したこと、中国共産党による一党体制は持続できないという見方が多かった。このような見方を、当時の香港居民も共有していただろう。

しかし、香港返還から20年が経ち、香港に居住する人々の意識や取り巻く環境は驚くほど変化した。その変化は、香港での『進撃の巨人』の人気ぶりから理解することができる。『進撃の巨人』とは、圧倒的な力を持つ巨人とそれに対抗する人間との戦いを描いた日本原作の漫画である。香港居民は、『進撃の巨人』の作品に触れ、巨人である中国大陸と人間である香港の戦いを想起するわけである。日本でも多く報道されたが、このような香港と中国大陸の対立構造は、2014年9月

に発生した「雨傘革命」で激化した。

そもそも、この対立構造は、香港の民主化をめぐる議論の中で形成された。香港は、世界的に見ても非常に稀な民主化過程にある地域とされる。その理由の一つが、長期的な民主化過程を計画しているということだ。二つ目に、民主化を進める主導権は中国大陸が握っている一方で、当該地域である香港は、中国大陸が提案する民主化案の拒否権しかないというねじれ関係がある。そして、そのねじれ関係の中で、香港と中国大陸のそれぞれが定義する「民主化」の意味合いにずれが生じてきたことから、対立構造ができあがった。その解決のための香港の民主化に関する議論は現在も結論に至っていない。

香港の民主化をめぐる議論は、台湾との比較で論じられることが多い。しかし、香港と台湾の圧倒的な差とは、香港返還期に制定された「香港特別行政区基本法」にある。これは、香港のいわゆる憲法として機能しているが、ここに「香港基本法の解釈権は全国人民代表大会常務委員会にある」と規定されている。これは、香港が中国大陸の統治下であり、香港がそこから独立することはできないということを意味している。すでに民主化が実現し、自由選挙による政治運営を行っている台湾とは根本的に異なる。現在、香港居民はこの状況に抗い、「真の民主主義」の獲得に奔走しているわけだが、その実現は難しい。

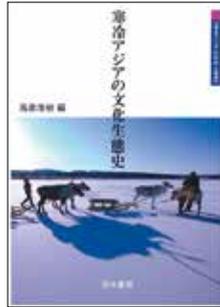
香港居民にとって悲観的な将来が待ち受けているといわざるを得ない現状を前にして、私個人としては、中国大陸にはない香港の独自性が消えていくことに一抹の悲しさを覚える。いつも訪れていた中国政治に関する古書店が閉店したり、広東語ではなく標準語を街中で多く聞くようになったりと、香港社会は劇的に変化している。香港と隣接している広東省は、中国大陸の中でも最も先進的な地域であるが、香港側の羅湖から税関を通り深圳側に渡ると、両地域の違いを実感することができる（写真2）。両地域の歴史や文化を保護し、それぞれの居住民の願いを最大限調整しながら、対立構造の緩和が実現することを切に願う。



（写真2）香港から深圳へ



寒冷アジアの文化生態史



高倉浩樹編
古今書院
2018年3月刊

熱帯アフリカを起源とする人類集団は、シベリアやモンゴルなどアジアの寒冷地帯にどのように適応しながら暮らし始めたのか、寒冷環境のなかで育まれた生業はどのような社会を作り出したのかというのが本書を貫く問題意識である。この問いは古くて新しい。

確かに人類文化史の観点からみれば、シベリア・モンゴル・中国東北部を中心とする東北アジアは、ステップの牧畜とタイガ・ツンドラ・海岸部の狩猟採集という環境適応が形成された地域である。一言で言えば非農耕地帯である。しかし、よりミクロな観点からは、狩猟・漁労・牧畜・農耕が様々な形で複合して生業と社会組織を形作ってきた。

これをつぶさに見ると、従来の生業と社会の常識をくつがえす事例が多数ある。例えば北太平洋沿岸部の先住民民族誌にみられるように、狩猟採集生業でありながら定住化し階層化された社会を形成した。また東シベリアではステップ型の五つの家畜を飼育する遊牧が、北上することで牛馬牧畜と狩猟複合が形成されるという具合である。つまり利用可能な資源とこれをはぐくむ自然環境、さらに政治経済的な動態は、極めて可塑的な形で人類の環境適応を可能にしてきたのである。

目次は次の通り。1「北東ユーラシアにおける人類の最寒冷期への適応」(鹿又喜隆)、2「アイヌ・エコシステムの舞台裏」(大西秀之)、3「永久凍土と人類文化の相互作用」(高倉浩樹)、4「西シベリア森林地帯における淡水漁撈とトナカイ牧畜の環境利用」(大石侑香)、5「生態環境が育む北アジア牧畜の特徴」(平田昌弘)。本書の特徴は考古学と民族誌において観察しうる局所的な自然環境のなかで展開した個別の生業複合に着目し、これを進化と適応という観点から分析することで、ミクロ環境のなかで人類集団が発揮しうる自然の利用・改変・保全の特質を明らかにした点である。それは東北アジアにおける環境適応をモデル化し、人類史を理解するための手がかりを提示することであった。(高倉浩樹)

越境者の人類学 —家族誌・個人誌からのアプローチ—



瀬川昌久編
古今書院
2018年3月刊

本書は、2015年12月に東北大学東北アジア研究センター創立20周年記念行事の一環として行われた一連のシンポジウム中の、「個人史からみる東北アジアの人の移動：マルチサイトな人類学の挑戦」(代表者・瀬川昌久)に端を発した学術論文集である。すなわち、その発表者、コメンテーター、司会者、そしてフロア参加者たちが、同セッションで得た問題意識をいったん持ち帰り、1年余の「熟成期間」を経てまとめ上げた成果である。

国境を越えた人の移動の研究には、国際的な政治秩序や経済構造などのマクロな要因から全体の趨勢を説明しようとする研究と、移動する個人や家族の個別具体的な経験に注目するミクロな研究が存在するが、本書はこのうちの後者の視点に徹することを意図している。それは文化人類学の直接参与観察の手法に適合した研究視座であるとともに、国家やエスニシティや地域コミュニティといった従来のな集団枠組みを超え、個人または個々の家族の個別経験を徹底して記述・分析してゆく個人誌・家族誌の方法論の確立を目指すものでもある。そのような視点から、本著は東北アジア諸地域を舞台とした越境移民たちの体験の次元に寄り添い、マクロな政治・経済要因には還元しきれない彼らの移動動機や葛藤・苦悩・未来に向けた意志などを、個別具体的に理解しようとする。努めている。

内容／執筆者は以下の通り：中国朝鮮族の越境移動／李華、中国福建省の出稼ぎ移民のライフストーリー／兼城糸絵、越境を所与のものとして生きる在日ハーフのライフストーリー／リー＝ベレス・ファビオ、台湾外省人の自己意識／上水流久彦、現代韓国からの海外移住者の心性／太田心平、珠江デルタの一家族の移動史／川口幸大、在日中国人技能実習生の社会生活／李斌、華僑文学にみる越境者の個人誌・家族誌記述／瀬川昌久。

(瀬川昌久)

活動
風景

沈み込む太平洋プレートの実態解明に向けて 平野直人

東北日本から千島列島、カムチャツカ半島に向けて沈み込む太平洋プレートを探るプロジェクトが大きく動き出した。本年 8 月、東京大学の東北海洋生態系調査研究船「新青丸」を用い、筆者は福島沖太平洋プレート上の海底岩石採取に着手する。また、筆者が参画する同・学術研究船「白鳳丸」による千島列島沖太平洋プレートの海底観測プロジェクトの施行も決定した。更に東京大学、海洋研究開発機構、金沢大学および筆者らによる研究チームは、太平洋プレートの深海掘削を提案し、沈み込むプレートの実態を探るプロジェクトを立ち上げた。

なぜこれらプロジェクトが重要なのか？「海溝でプレートが沈み込み、巨大地震が発生する」という周知の事実があるが、それは漠然とした概念に過ぎない。そこにある岩石の種類、温度、圧力、化学組成、含水無水等の違いにより、地震を発生させる岩盤の破壊の度合いや伝わり方といった性質が大きく左右されるため、震源域がどこまで広がるのか、破壊のきっかけは何かなど、全く分かっていないのである。にもかかわらず、太平洋プレート上にどんな岩石があるのか未だ認識されていないと断言している。実際に、2011 年に発生した東北地方太平洋沖地震の震源断層掘削（JFAST: Japan Trench Fast Drilling Project）では、震源断層から岩石採取に成功したが、予想外の岩石が採取されている。

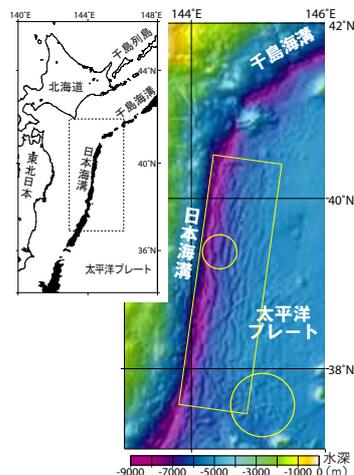
図を見てほしい。太平洋プレート上では日本海溝に平行に多くの段差がシワのように延びている（図中の黄色□域）。これらは沈み込むプレート自身に引っ張られて発生する正断層地震の痕跡そのものである。地形から明らかのように断層運動によって海底そのものが大きく変動するため、大きな津波が発生する。1933 年に発生し、津波被害をもたらした昭和三陸地震（気象庁マグニチュード 8.1）は、まさにこの巨大地震であった。これら断層に沿って水が地下に浸透し、沈み込むプレートの性質を変えてしまっているという説もあるが、分かっていない。また、沈み込む太平洋プレート上にはこれまで認識されていなかった地球上の新種の火山「ブチスポット」海底火山群が図中の黄色○域で存在していることが 2006 年に判明した。しかもこの火山は多量の二酸化炭素を放出する特異な火山であり、上昇するマグマが想定されるプレートの岩石や化学組成を変えてしまっている可能性もある。このように、最近十数年の研究成果によって太平洋プレートの新たな実態が認識されつつある中、重要な研究プロジェ

クトが動き出したのである。

太古の昔から地球の表層はプレート運動によって大陸の衝突と分裂が繰り返されてきた。現在地球上の大陸は分裂しているが、全ての大陸がひとつになった最後の超大陸は、およそ 2 億年前頃まで存在していた「パンゲア大陸」であった。その時から現在まで、極東ロシアから日本列島にかけ

ての東北アジア沿岸地域は、常にプレート沈み込みによる巨大地震や火山活動など激しい地殻変動にさらされてきたのである。直近の超巨大地震（マグニチュード 9 以上）では、2011 年に発生した東北地方太平洋沖地震以外にも、1952 年ペトロパロフスク・カムチャツキー付近を震源とするカムチャツカ地震があった。次の大きな地震はいつどこで発生するのか？いわゆる地震予知は残念ながら相当難しいだろう。であればなおさら、地震や火山はなぜ発生するのかを知る研究と、数百年数千年のスケールで先人たちがどのように対処してきたのかを顧みる地域研究が重要であり、それらの情報は、今後私たちが自然災害にどのように向き合っていくべきかを考えるヒントになるだろう。

沈み込む太平洋プレート研究は、既に述べた国内の研究者に限らず、世界の研究者も注目している。筆者はドイツ・バイエルン地球科学研究所との共同研究「沈み込むプレートで活動する新種の火山の成因解明」プロジェクトを進めており、アメリカ・マイアミ大学と共同で「北海道東部～北方領土の太平洋沿岸に連続する未解明地質調査」プロジェクトも進めている。また、スイス・ローザンヌ大学とは「太平洋プレート深部組成変化の解明」プロジェクトを進めている。東北アジア研究から切っても切り離せない太平洋プレート、その全貌は近い将来解き明かされるはずだ。



日本海溝に沈み込む太平洋プレート周辺の海底地形図。白黒で示した左上図中の点線部の詳細地形を示している。

編
集
後
記

今号も充実の内容となりました。「最近の研究会・シンポジウム等」では活発に研究のアウトプットがなされていることがわかります。各種コラムからはその研究の内実が垣間見られます。寺山教授や内藤助教の記事では、現地を実際に訪れたからこそ分かる、極東ロシアや香港の現状が生々しく描写されています。また、平野准教授の記事からは地震予知につながるかもしれない、太平洋プレートの研究が新たな段階を迎えつつあることがうかがえます。ご味読ください。（友田昌宏）

東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター 第 77 号 2018 年 6 月 29 日発行

編集 東北アジア研究センター広報情報委員会

発行 東北大学東北アジア研究センター 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>

